

大人が希望をなくせば、子どももそれをなくしてしまった

添田勝（そえだ・まさる） 三三二歳

市議会議員 神奈川県

——三月一一日、午後一四時四六分。東日本大震災が発生したその瞬間、翌月の市議会議員選挙に向け、添田さんは川崎市の街頭に立つて演説していた。故郷の福島から上京して、進学・就職し、十数年を過ごしたこの地で、政治家になる覚悟を決め、初めて立候補した矢先だった。

そのときはですね、「何だ、これ?」というくらい揺れまして。川崎は震度五だったんです。慌てて（選挙）事務所に戻って、事務所の皆は大丈夫だ、と確認しました。しかし、東北が大変だと知りまして。翌日になると、とりわけ、故郷の福島が大変だとわかりまして、その日のうちに向こうに行くと決め、午後には出発しました。（安売り量販店の）ドンキホーテで、水とカップ麺とトイレットペーパーと紙おむつとガーゼ。それを買えるだけ買って、積めるだけ積んで持つて行きました。夜学の大学院時代に、防災政策を少し学んでいました。震災時

に必要なものとして、「水」は誰でも思い浮かぶんですけれども、実は、排泄に関してかなり困る、と。阪神大震災を題材に話したときにも、排泄の重要性を聞いていて。それでトイレットペーパーは、まずは必要だろう、と。あと、（介護の援助に）福島へ入るので、おむつとか身体をふくためのガーゼですね。

実は、福島に入る前に、まず（岩手の）陸前高田、そして（宮城の）気仙沼に入りました。（震災）直後ですから、本当に物資がないんだろう、と。すべて（津波）流されちゃってますから、少しでもそつちに物資を届け

たい、と。それと、「本当に困っていることはどんなことですか」と聞こうと思つてですね。現場に実際足を運んで、そこで本当に困っている人の声を聞かないと、本当の支援ができない、と思って行きました。

岩手や宮城（両県での行き先）に目星はなかつたんですけど、陸前高田は壊滅状態だつたじゃないですか。ですから、どうにかして、たどり着こうと。一二日の午後に川崎を出て、陸前高田に着いたのは翌朝でしたね。高速を使えないじやないですか。下の道を迂回しながら。取りあえずそのときまだ、関東近郊にガソリンはあつたので、ちょこちょこ給油しながら。途中、道路が寸断されていて、亀裂が入つて段差になつてるんです。そこをゆづくり越えながら。道路は無くなつてるので、土の道を行つて。「これが幹線道路だな」と思つたところを、北上していきました。

学校を目指しました。学校つて比較的、こう、高台にあるじゃないですか。だから、陸前高田の中でも、そのままの形で学校は残つていた。行つてみたら、やっぱり避難所になつっていました。当然、最初は、「誰、あなた?」という反応でした。ただ、被災の翌日で、そもそも

も物資も何にもないという状況だったので、「物資をお持ちしました」と言えば、大半のところでは、「ありがとうございます」と。「本当に皆さんのが困つておられること、つてなんですか」という話を、单刀直入に聞けば、だいたいの方は答えてくださいましたね。

（震災の）直後だつたので、「避難所に逃げられてよかつた」という安堵感を持つた人が比較的多かったです。失望感なのがなと思つていたら、「いやあ、助かってよかつた」という方が多かったです。『じゃあ、これからどういう支援が必要ですか』と聞いて、「まだそこまで頭が回らん」と言われたところもありました。まあそうだろうな、と。

その反面、「自分は助かつたけれども、他の家族がわからん」という安否確認への不安を口にする方も多かつた。陸前高田、気仙沼、（仙台市）若林区、と南下してですね。一三日の夜には、福島に入りました。

——添田さんは、川崎で介護職に七年間携わり、介護福祉士の資格も持つ。震災直後、地元福島の介護仲間から「人手が足りない」との知らせが届いていた。

僕の出身は、石川町というところです。福島第一原発から、四〇、五〇キロ圏のあたり。（石川町よりも南西方向の内陸側にある）小野町がジャスト四〇キロくらい。だから、すごい微妙なところなんです。退避圏内より外側だから安全とは言われているが、安全と思っている人は誰一人いない。

石川や小野では、介護の援助が主な目的で入りました。福祉関係者も自身や家族が被災したら、避難所に駆け付ける余裕なんてないですよね。具体的には、水は出ないですから入浴ができないので、（身体を拭く）清拭介助だつたり、トイレの介助だつたり、いわゆる一般的な介護の支援です。ただ、これも「他人の身体をこうやる」というのは、（介護ヘルパーなど）資格がないとできなんですよ。そうすると、できる人が限られてくる。「自分が役立てるのをやりたい」と思いました。

それと、僕が手伝つた人つていうのは、いわゆる災害弱者たちじゃないですか。自力で迅速に逃げられない人たちです。災害が起きたときにどう思つたか、その人たちの声を実際自分が聞かなきやいけない、と思ったんです。それを聞いて、こんどは川崎で同じことが起きたと

き、どういう風にそれを活かすことができるか、と。介助をしていて、まず、物資がないと感じました。タオルとかもないし、水もないから、清拭ガーゼは、かなり重宝されました。電気がないので、電動ベッドがあつたとしても、それが使えない。寝たきりの人が食べるとき、着替えるとき、起き上がるときなど、身体が起こせないというのは辛いんです。何とか人力でやるしかない。僕は男性なので、ガツと抑えてバツとやれちゃうんですけどね。

避難所は、普通の水洗トイレでして、水が流れないので、ポータブルトイレ。それはもう、介助する人がいればなんとかなつたんです。ただ、設備が介護施設とはまったく違うから、トイレに移動させるにも、車いすがあれば一人でやれるところが二人になつたりとか、階段の上り下りだつたりとか。人手はばつと多くかかる。あと、在宅で介護を必要とする人。そこがかなり問題だつたんです。まず、どう救い出すか。福島は田舎だったので、どこに独居老人がいるかは、ご近所さんも知つていたし、いち早く行政につないで、迅速に救出できた。これが川崎だつたら、絶対無理じやないですか。それは

見習わなければいけないな、と。それと、（在宅介護の利用者は）まず介護施設に行くが、あふれている。行き先がないから、避難所に行く。でも、設備は介護に関しては貧弱ですから、その辺は困るわけです。

そうだ、あとこれも重要な問題なんですが、大広間にいろんな人が寝泊まりするじゃないですか。そのなかで、言葉は悪いけど、認知症の方に対しても、「そんな、ばけてる爺さんと一緒にかよ」という感じの、声には出さない態度。あきらかに迷惑だと示す人がいるんです。認知症の人たちと相対したときの一般の人の接し方。日ごろ（認知症の人との）接点が少ないから、こうなるのかな、と。これも、川崎なら、もっとひどいだろうな、と。

（介護が必要な独居の人の）家族は、離れて住んでいるケースが多いですから。子どもたちはもう都会で新しい家庭をつくっている。そういうケースが多いので。（家族が）一緒にいた人もいたかもしれないんですけども、私が接したのは、遠くにお子さんがいる人がほとんどでしたね。だから、「（子どもに）連絡がつかないから心配」と。

（原発の事故が報道されていくにつれ、川崎にいる自分

の）家族からは当然反対されたんです。でも、やつぱり、松下幸之助が言つていた言葉なんですけども、「政策は机上でつくつていてようじやだめだ。あくまで現場でつくれ」と。その現場の最前線に自分が入り込んで行つて、汗流し、涙流して、そこで培うのが本当の人に役立つ政策だ、と。それに忠実に。なので、まったく迷いなく、行動しました。

――〇一一年は四年に一度の統一地方選の年。震災から二〇〇

日ほど過ぎた四月一日、川崎市でも市会議員選挙が公示された。しかし、選舉戦の様子は、いつもと違つた。多くの候補者が選挙運動の「自肃」をとなえ、活動を手控えたが、添田さんは独自に活動し、当選した。

本当は、選挙がなかつたら、今（四月初旬）も福島に行つておる状態だつたかもしません。僕自身、こういうタイミングで選挙しておる場合じやないだろ、って思つていてですね。なので、福島県人会会員として「義援金を募つてほしい」というお話をあつたときは、「そ

を募りました。

義援金は、福島県出身者として集めました。本音を言えば「名前をドカンと出してやつた方が」とも思つたんです。（立候補者であることを訴えずに義援金だけを募ることは）無駄な行為だ、と選挙のプロみたいな人から言われたんですが、これは、福島県出身者としてやるべきことだ、と思つて。

「選挙活動の一環として義援金を集めている」と思う方もいらっしゃる、とは思いました。絵本の活動に対しても。ただ、社会的に正しいことなんでも、気にしてたら何もできないから、気にしていません。だいたいの方は、素直に受け取つてくださつて。絵本の冊数が示すように、ああ、やつてよかつたな、と。一三〇〇冊ですよ、すごいと思いませんか？　選挙中でも被災地のためになることをやりたいな、と思ってやつていたので、「正しいと思つたことは人がどう思われようとやり抜くんだ」という一心でやりました。

「今回の震災が、添田勝を市議会議員に推した」という声があります。福島の人間だったから、というのはあると思うんです。ただ一方で、「じゃあ、福島から出れば

いいじやん」という声もあつたんですよ。当然言われるだろな、と思つっていました。でも、ずっとここで、川崎で介護をやつてきましたし、川崎は第二の故郷だと思っていますからね。

福島は、当たり前のようにコミュニティーとか、地域のつながりがある。今回、福島に行つたときにも、とても強く感じたんです。当たり前に近所、地域が人の中にあります。その一方で、土着意識のない都市は弱点だらけです。将来、都市の高齢化、つて一気に来るじゃないですか。そこに、首都直下型地震なんて来たら……。あらためて、自分を必要とするのは川崎だろう、と思いましたね。工場地帯も多いし、震災が起きたときは、甚大な被害が予想される。そのときは、災害弱者対策。具体的には、地域のつながりをつくる。そういう政策を推し進めないといけない。

さつきの「震災が添田を推した」というのは、確かにそういう側面もあるし、そう思われてもしようがないと思つています。だけど、さつきも言つたんですが、人がどう思おうと、正しいと思ったことはやり続ける、と。信念に基づいて動くだけなので、使命だと思つてやろう

と。

そして今回、川崎の人から信任を受けました。ただ、震災があつて、なおさら福島県出身者として、人として福島には貢献しないといけないな、という思いです。やつぱり、生まれ故郷ですから、究極な言い方をすると、「生き残つてもらいたい」と思つています。自治体はものすごく財政が厳しいじゃないですか。川崎よりも、ものすごい厳しいわけですよ、福島県なんて。僕の田舎に至つては、八割くらいは義務的経費に回さざるを得ない。

—添田さんが石川町や小野町の避難所で介護支援をしている間、近くの福島第一原発の事故は、刻々と深刻さを増していました。いあるな、と思つています。

絶対に必要な義務的経費をのぞく、自由になるお金が残り二割しかない。一方、川崎は（義務的経費が）六割くらいで、残りの四割は自由に使える、というのが現状です。

その意味において、福島県には自治体として、何とか生き残つてもらいたい。でも、超高齢化を考えると、絶対川崎だな、と。それは震災前の認識です。政治は、川崎でやると決めた。それは変わらない。でも、今、被災地・福島をどうにかしなければいけない。福島県出身者だから、故郷に貢献しなければいけない。じゃあ、何をしたらいいか。政治家じゃなくてもやれることはいっぱい

いいじやん」という声もあつたんですよ。当然言われるだろな、と思つていました。でも、ずっとここで、川崎で介護をやつてきましたし、川崎は第二の故郷だと思っていますからね。

福島は、当たり前のようにコミュニティーとか、地域のつながりがある。今回、福島に行つたときにも、とても強く感じたんです。当たり前に近所、地域が人の中にあります。その一方で、土着意識のない都市は弱点だらけです。将来、都市の高齢化、つて一気に来るじゃないですか。そこに、首都直下型地震なんて来たら……。あらためて、自分を必要とするのは川崎だろう、と思いましたね。工場地帯も多いし、震災が起きたときは、甚大な被害が予想される。そのときは、災害弱者対策。具体的には、地域のつながりをつくる。そういう政策を推し進めないといけない。

さつきの「震災が添田を推した」というのは、確かにそういう側面もあるし、そう思われてもしようがないと思つています。だけど、さつきも言つたんですが、人がどう思おうと、正しいと思ったことはやり続ける、と。信念に基づいて動くだけなので、使命だと思つてやろう

避難して来る人って、徐々に遠くの避難所に行くんです。（原発に最も近い）小野の避難所が満床だから石川、石川が満床だから白河、と外に外に。そうすると、（政府が待避を指示した）圈内に、より長く残っていた人たちが、実は最前線の避難所じゃなくて、遠いところの避難所にいる。盲点なんですけど、原発よりも遠い避難所にいた人の方が、被曝している可能性がある。

小野町が原発（事故による避難指示圈内）の最前線だつたけど、（それより遠い）石川に実際被曝した人がいたらしい。老人ホームとか病院とかにいて逃げ遅れた人が、自力で動けない。そういう人たちを後から検査したら被曝してた、って。

震災前の石川や小野の人は、全く自分たちの地域に原発は関係ない、という気持ちでした。自分が二〇年近くそこに住んでいましたから、分かります。原発と隣り合わせだという認識は、石川や小野町の人たちは薄かったです。

でも、今回こうなって、「やばい、身近だぞ」という意識にさせられた……。それが、正直なところですね。

（福島第一原発のある）大熊町や双葉町の人は、常に原

発がそばにある、という認識だろうし、実際、（震災直後に）避難もしている。石川や小野の人って、いうのは、「危くないけど、絶対危くないわけない」と思つて、今は暮らしているんですよ。「本当の真実は何なの？」っていう不安を持ちながら。

今朝、郡山の兄と話をしまして、「その後、どうだ？」と聞きますと、「状況はそんなに変わっていない。おまえが来たときより、物資が少し入って来ているくらいだな」と。ただ、原発に関しては、「結局これからどうなるか分からんという不安の中で、皆、暮らしている」と。

一方、福島の場合は、解決の方に向かつて行く側面と、いかんともしがたい問題が、ずうっと付きまとっていくんです。被曝は、長く付き合っていかなければいけないだけのはずじやないです。

津波の被害自体は、福島よりも、宮城、岩手の方がよっぽど厳しい状況だった。でも、ものすごい津波被害だけど、それ以後つて、がれきを撤去したりとか、ライフラインを回復させたりとか、解決の方に向かつていくだけのはずじやないです。

「いやあ、これ復興するのに何十年かかるんだろうな」っていう話が多かったんです。福島も、復興はそうですけど、「そもそもここに住めんのか、これから……」という、全く予測不能な不安がありましたね。それは今も変わっていない。

チエルノブイリ（原発）の事故って、少し種類が違いますけども、当然、（福島県で避難している）皆さん記憶に残っていますよね。結局、コンクリ詰めとかしないと、一生住めないんじゃないかと思つてましたし、実际そうなりそうです。「どうなるか分からぬ」という不安と、「将来もつとひどくなるんじやないか」という不安と。

石川や小野の避難所の人にはね、「だまされた感」がありました。（原発は）安全だと思つていましたから。

ここは感情的などろと冷静なところが混じり合うのですが、「われわれ（福島の人）は、原発でつくられる電気を使つていてるわけではない。使つてるのは首都圏の人。しかし、被害はわれわれにだけ来る」とりわけ、この意見は四〇、五〇キロ圏の人が多くつた。二〇、三〇キロ圏内のは、雇用の恩恵とともに受けているわけで

ですよ。

その土地にずっといる人たちに、無念さは当然あります。地元の無念さは、計り知れません。僕の友人知人でも、連絡取れない人がまだ何人かいます。どこに避難しているか、分からぬ。「今もまだ連絡取れない」ってことは、津波の直後に、悲しい結果になつたんじやないかと思うんですけど。（福島の沿岸部は）原発が落ち着かない、搜索も進まないわけですよね。

——添田さんには、福島県に三人の甥がいる。小学校二年生の八歳、小学生になつたばかりの六歳、そして三歳。震災後はしばらく、川崎で避難生活をしていた。

どんなに小さい子でも、大人たちの様子から何かあつたと感じているでしょうね。石川町を歩いていると、雨が降つていなくても、みんな、雨合羽を来て歩いてました。（原発事故の退避圏外の）石川でさえも。そうしたら、いやが応でも、子どもたちは、とにかくやバイ状況になつていて、と感じるでしょう。うちの三歳の甥っ子でさえも「何か尋常じやないことが起こっている」とい

うことは分かつていました。上の子たちは「福島で何が起きている、危険な状況である」ということは、十分認識してましたね。

川崎に、二週間くらいいました。僕の両親が、孫を心配して（福島から）連れ出したんです。兄夫婦は仕事で離れられなくて。

たまに昼間、選挙事務所で預つていると、人の出入りは激しいし、打ち合わせもあります。下の二人の子が騒ぎ始めて、叔父である私が「うるさい！」と言うと、上の子が言うんですよ。「おまえたち、静かにしろ。おれたち、どこにも行くところがないんだから」って。涙が出そうになりましたよ。

こう、甥っ子が自宅で寝てるじゃないですか。遅いんですね、僕が帰つて来るの。で、起こさないようドアを静かに開けるんですけど、カチヤつていう音に、びくっと起き上がるらしいんですよ。とくに三歳の子どもは。そういう、わずかな音に敏感にさせてしまった地震の恐怖。子どもの傷は相当深いな、と。自分の甥っ子の姿を見て感じて、何かしなきやな、って思った。

それで始めたのが、絵本だつたんですよ。うちの子ども

もが、絵本を見て笑顔になつていて、「これだ！」と。義援金と合わせて、募りました。

年長の子は（小学校の）入学式があるのと、長男も学校が始まっちゃうというので、（福島に）戻らざるをえなくて。年長の子の卒園式は、たぶん、なしになつたんじゃないですか。福島の親たちは、みな、不安でしょうね。でも、兄と話すんですよ、「川崎で同じことが起こつたら、おまえのことは助けられないんだから」って。兄も行政マンです。何が起つても、地元を離れることは許されない。だから、つて、でも……、いや、でも、そ�だと思いますよ。

僕が一番不安に感じるのは、子どもたちの生命と、福島が付き合つていかなければいけない原発の不安に対し、大人たちが希望を失つてしまつこと。福島は農業の県なんで、間違いなく、これから経済的に大打撃が来る。そのときに、大人たちが希望を失つた場合、間違いなく子どもにも出てくる、と。そこが一番僕は不安として。やっぱり子どもたちは、大人たちの姿を見て育ちますから。それがこう、前を向いて、しっかりと歩んで行つていい大人の姿だとしたら、僕は、それは、子どもには

本当に不幸なことだと思うのです。一人の大人として、福島県出身の人として、とにかく次世代の子たちの希望と心身の健康、つて重要なんです。

「東北人かたぎ」というのは確かにあるんだな、と。「文句言つてもしようがない」。もちろんその、最低限補償してもらわなければいけないところはあるんだけど、結局のところ、自分たちが前向いて、自立してやつていくしかないじやないですか。ここから先は、想像の話ですけど、そういう人は少なからずいるんじやないかな、と。僕は、そういう姿こそが、子どもたちに希望を与えるんじやないかと思つています。

（■聞き手・橋場節）